

世界と抱き合おう——『人間失格』を読んで

「いま＝ここ」

幼少から中国の近体詩を読んできたので、俳句にふれたばかりの頃、私は軽蔑していました。たった十七音で構成される文学作品で、起承転結もなく、類義語をたたみかける表現もなく、対句さえありません。文学の様式として、芸術の価値を失っているのではと思っていました。

しかし俳句は読めば読むほど夢中になってしまいます。松尾芭蕉は「物を見て取所を心に留めて不消、書写して静かに句すべし」と言っています。俳句はある種の瞬間の芸術であり、すべての時間が句の中で静止し、読者に限りない感動を残します。俳句には凝った構想が要らず、街を歩いているとき、春の木漏れ日を目にしたとき、秋風が梢をかすめる音を聞いたとき、心に感じたもので一首の俳句が生まれます。

加藤周一は、俳句は「いま＝ここ」に注目した作品であり、「日本語叙情詩形式の歴史の発展の最後の帰結」でもあると述べています。実際はその意味のとおり、俳句は日本語叙情詩の帰結であるのみならず、日本文化の縮図でもあります。

現代日本の「百科全書的」学者と称えられる加藤周一は、88歳の時に著した『日本文化における時間と空間』のあとがきで「この本は日本の思想史について私の考えてきたことの要約である」と書いています。同書で彼は、日本文化のさまざまな面を結びつけ、東西の他国の言語や歴史と対比して、日本文化の「いま＝ここ」の特性を詳しく述べています。彼は日本語のうち動詞を後に置く独特な構造について、日本の伝統的な村と鎖国、茶室、神社、天守閣、そして「江戸っ子は宵越しの銭を持たない」と福沢諭吉の「大勢主義」についても記しています。軽い筆致で幅広い内容を扱い、私が学んできた知識を串刺しにしてさらに多くの新鮮な内容を補充してくれた同書には、深く啓発を受けました。

日本文化の初めは、律令時代まで溯れるようです。日本が当時の唐朝から学んだ基本的な国家制度が、この時期に安定して発展しました。中国の文字と近体詩も同じ時期に日本に入ったものの、二者の文化は背景色が明らかに異なります。日本文学の古典『万葉集』や『源氏物語』には、のちに「もののあはれ」と呼ばれる要素が含まれています。大西克禮は『幽玄とあはれ』の中で、「もののあはれ」とは「ものを知る心」で、外在する事物の現在の美しさと、いつでも零落してしまうことを知ることだと述べています。そこで、どうしようもなく極致の耽美を求め境地が開かれたのです。この時期の散文の特徴は最も際立っていて、『枕草子』に記されているのは宮廷日常生活のあれこれですが、往々にして一瞬で感動を呼び、今なお広く伝わっています。

貴族の時代は数百年後、武家によって終結させられますが、日本文化の「いま＝ここ」の特徴には変化が発生していません。北条一族は節約を尊び、武家の屋敷を建築する時「増築」

の原則を打ち立てました。事前に全体を計画することなく、用途によって随時増築していくのです。このため武家屋敷は一般に対称的な間取りとなっていないのは、目の前の観念を重視したことによるのです。武士の間の「下克上」もよく政局の動揺を引き起こして、『徒然草』のように「人生の無常」を嘆く人も多くいました。こうした観念は陰でまた日本の文化の特徴を強化しています。

武家と禅が合体し、最終的に「いま＝ここ」の文化の特徴を極致に推し進めました。鈴木大拙は『禅と日本文化』の中で、「悟りは禅であり、概念に依存にせず直接到達できる真理」で、「日本人心理の強みは直感的に最も深い真理をつかみ、表象を利用してそのはっきりした実際を表すところにある」と説明しています。「いま＝ここ」の文化の基礎を持つ日本人は禅に優れ、禅を基礎として日本人は茶道、花道、武士道を発明しました。これらの文化の支流が触れているのはすべて禅の「悟り」の体験、つまり「無心之心」に達し、一瞬で無意識に入ることを求めています。禅が日本文化の哲学化を完成して、人に時間と空間を超越させたと同時に、その文化の基礎「いま＝ここ」もさらに深く民族の性格に入ったのです。

日本文化の「いま＝ここ」の特徴がもたらした業績は誰の目にも明白で、日本人は自らの文化をダイヤモンドに作り上げたのです。それぞれの小さい断面がすべてあでやかに輝いて感動させ、一瞬一瞬が比類なくまばゆいのですが、この特徴はいいことばかりではありません。

丸山真男は『日本の思想』の中で、日本の思想史研究は多くの困難に直面しており、困難な原因の一つは一貫したイデオロギーがないことだと述べています。確かに、「いま＝ここ」の文化の特徴のため、伝統的な日本人は決して哲学の思考を行うことに優れておらず、世界的に有名な思想家もあまり現れません。また、「いま＝ここ」に注目するため、日本人は融通をきかすことに優れ、いつでも転向に備えており、特定の価値観に固執しません。このような行為も日本への道義上の批判を招いています。

世界の文化は色とりどりなので、もっと多く理解し、もっと多く交流しなければなりません。

読んだ本：

『日本文化における時間と空間』、【日】加藤周一（著）、【中】彭曦（訳）、南京大学出版社

参考文献：

『幽玄とあはれ』、【日】大西克禮（著）、【中】王向遠（訳）、上海訳文出版社

『禅と日本文化』、【日】鈴木大拙（著）、【中】陶剛（訳）、生活・読書・新知三聯書店